

とんだマリモの話

中 沢 信 午

樺太(サハリン)南部の頭場湖(トウバ湖)は今日ロシア語でスヴォボドノイエ(Svobodnoye)湖と呼ばれている周囲11kmほどの淡水湖である。ここにマリモ(正確にはカラフトマリモ, *Cladophora sauteri* f. *kannoi*)が生育していたことは確実で、これについては菅野利助(1934)および時田郁(1954)の調査報告があり、1937年版の「樺太郷土写真帖」にもその写真がある。また樺太庁はこれを天然記念物に指定していた。

その後の土地開発や湖水の富栄養化などによって今日ではマリモが絶えたのではないかと思ひ、私が現サハリンの博物館および漁業協会に照会したところ、よくはわからないが地元の住民はそのような植物を見たそうだ、という返事があった。

さて1989年6月、東京在住のA氏は植物学者ではないが、私用にサハリンへ旅行するというので、彼にマリモの話をしたところ、彼自身が頭場湖まで行って見てくることになった。ところが近くまで行くと、雪どけ水がはん濫して湖までは行けないので、地元の人たちにマリモの事をきいてみた結果、マリモは頭場湖のみならず、近くを流れる川の上流にもあるから、あとで採集して日本へ送ると約束したという。

やがて8月のある日、A氏から私に電話があり、サハリンからマリモが届いたので私に送るという。さっそく翌日、私のもとにそれが届いた。いよいよ来たか!と、私が包みを開いてみると、何とまあ、それは淡水の頭花植物エゾノヒルムシロ(*Potamogeton gramineus* var. *heterophyllus*)であった。集まって球化しているわけでもなく、ただ数個体がポリエチレンの袋に入っていたにすぎない。啞然たる私の表情を想像していただきたい。

ここで私は植物分布などの問題はよほど厳格に調査した結果でなければ語れないと思った。風聞やうわさ話などを、もしも紹介する場合には、あくまでもそうした未確認情報として記述せねばならない。A氏が現地できいた話を私がそのまま“現在も頭場湖にマリモがあり、また近くの川にもマリモはある”などと紹介したら大変なでたらめになってしまうと、深く感じたのである。それと同時に、私たち自身も自分の専門外のことがらについ

ては確定的な言動を慎む必要がある。

実はマリモではないが、こんな事もあったのである。1976年の夏、函館近郊の大沼公園のホテルを会場に、生花の夏期大学講座が開かれた。私もちょっと北方植物の話をつたのまれて、この集会に出かけていた。観光案内によると近くに蓴菜沼(じゅんさいぬま)という小湖沼があり、ここにはジュンサイが生育するというので、夏期大学を受講していた数名の婦人たちがその沼を見に行き、岸辺に生えていた水草を採って帰り、ジュンサイがありました、これです、とって他の婦人連中に見せていたのに私はおどろいた。なぜなら、それはジュンサイにあらずして、これもエゾノヒルムシロであった。

おなじエゾノヒルムシロが、ジュンサイになったり、マリモになったり、話は笑いぐさだが、私たちとても専門外の植物を他人に見せる時には充分慎重にしたいものである。一方頭場湖に今日もマリモがあるかどうか、現在まだ確かでない。ただ最近現地からの手紙によれば、直径2cmぐらいのくりのいがに似た形の藻のかたまりが、ときどき頭場湖で見られるという。いずれ調査に出かけたいと考えている。首都ユジノサハリンスク(Yuzhno-Sakhalinsk, 旧名豊原)の東南方約55kmの地点である。

引用文献

- 菅野利助, 1934. 日本産マリモの研究, 主として其球形集団に就て. 日本水産学会誌 2, 217-228.
Tokida, J., 1954. The marine algae of Southern Saghalien. Mem. Fac. Fish. Hokkaido Univ. 2 (1), 1-264.